

# 網走市・小清水町・斜里町における オホーツク海沿岸部周辺の鳥類

川崎康弘

〒099-36 北海道斜里郡小清水町672-45

## はじめに

網走港から浜小清水・止別を経て斜里漁港に至る海岸線は、比較的地形の起伏が少なく、海岸沿いに小清水原生花園に代表される砂丘・砂州が発達し、藻琴湖や濤沸湖などの海跡湖沼が点在する。海岸砂丘や湖沼等、大部分の地域は網走国定公園に指定され、湖沼や湿地、草原等の自然環境が保護されており、年間を通じ、数多くの鳥類が観察される。この地域を対象に、これまで、佐々木（1990）および斎藤（1996）によって網走市から濤沸湖までを含む、網走地方の野鳥が報告（佐々木：256種、斎藤：277種）され、濤沸湖および小清水原生花園の鳥類は、小川ら（1975）、日本野鳥の会小清水支部（1987）などによって、また、濤釣沼から斜里漁港までにかけての地域は、森（1979）などによって紹介されている。

筆者は近年、この広い範囲のうち、主に5地域を自らのフィールドとして野鳥観察を行ってきた。すでに一部珍鳥の記録などを報告（川崎，1996）したが、水鳥の飛来状況等、幾らかの新知見を含め、これまで観察された記録をまとめ、報告する。

なお、本報告ではカモメ類の一部を除き、種の名、学名、分類を山階（1986）によった。

## 観察地および方法

### 観察地

筆者が観察を行ってきた地域は、網走港およびポンモイ海岸、藻琴湖周辺、濤沸湖・小清水原生花園周辺、止別海岸周辺、斜里漁港周辺の5つに大別できる（図1）。以下に、それぞれの地域の概要を記す。

#### ・網走港およびポンモイ海岸（網走港周辺と表記）

網走港は網走市東部、網走湾の西端にあり、網走川の河口から帽子岩へと伸びる防波堤から始まり、約1km東までの区域に広がる港湾である。港

構内には幾つか防波堤が伸び、網走川河口部まで流水が流入することはあまりない。ポンモイ海岸とは網走港から鱒浦漁港までの間の岩礁海岸の通称であり、網走港により波が緩衝され、穏やかな湾状を呈している。

今回は、1994年11月～1996年12月までの冬期間（1994年11月～1995年3月、1995年11月～1996年3月、1996年11,12月）の観察記録をまとめ、報告する。

#### ・藻琴湖周辺

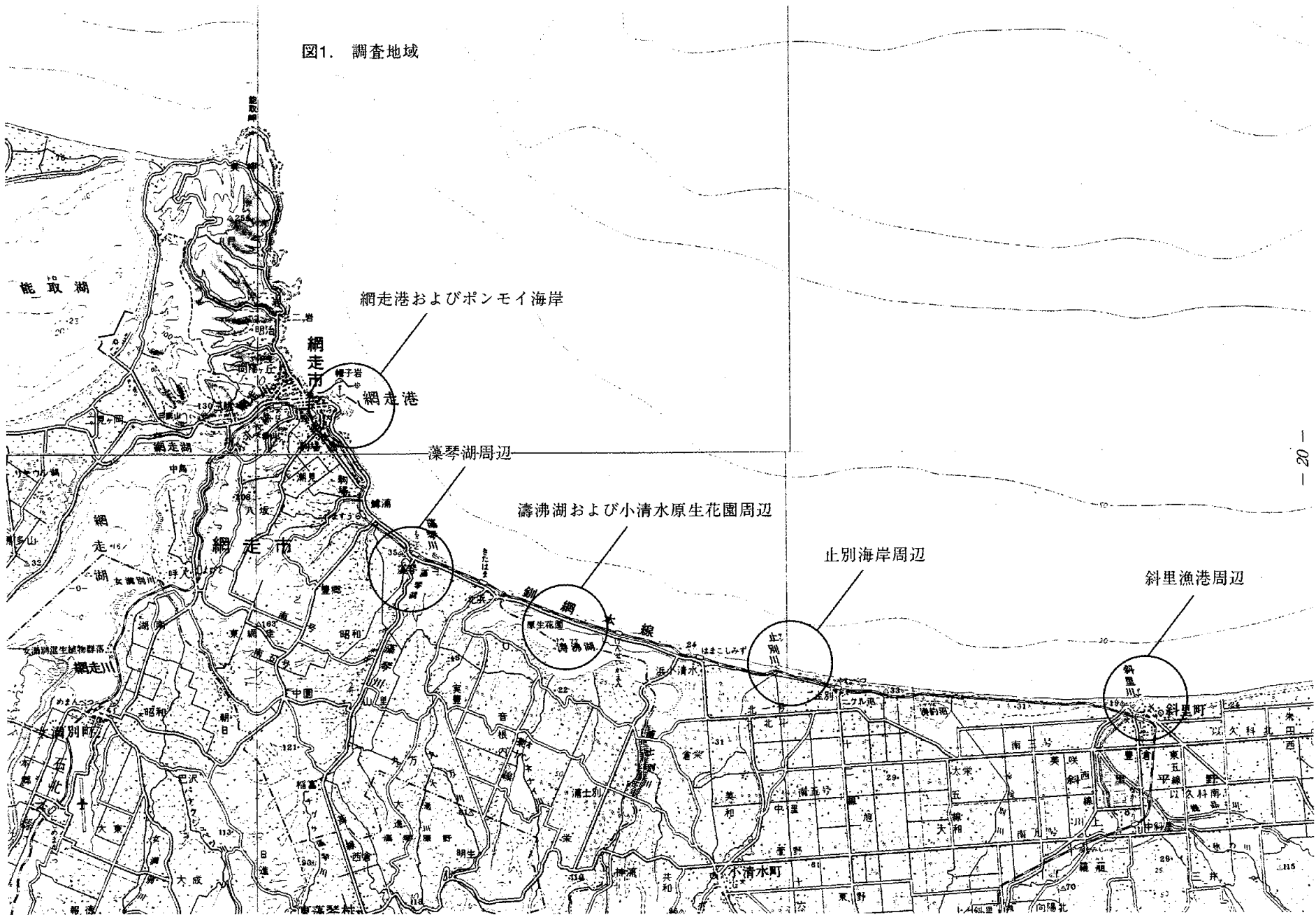
藻琴湖は、濤沸湖の西方2kmに位置する海跡湖で、湖面積1.12km<sup>2</sup>、平均水深1.7m、最大水深5.8mの湖である（北海道公害防止研究所，1990）。南方の藻琴川が流入し、流出水は北側の砂丘を破る小さな水路を経てオホーツク海に注いでいる。この水路は冬でも閉塞することはない。周囲は標高30-40mの台地に取り囲まれ、湖岸を取り巻くようにヨシ原、草原、林が残されており、カモ類などに良好な繁殖環境を与えている。

今回は1995年と1996年の、3～8月までの間に観察された鳥類を表にまとめ、報告する。

#### ・濤沸湖および小清水原生花園周辺（濤沸湖周辺と表記）

濤沸湖は小清水町と網走市との境界のオホーツク海岸に位置し、三方が10-20mの丘陵地で、北側がオホーツク海の砂浜に通じている、湖面積9.01km<sup>2</sup>、平均水深1.1m、最大水深2.5mの海跡湖である（北海道公害防止研究所，1990）。流入河川は南方から浦士別川、丸万川、その他小河川で、北側は浜小清水から北浜に至る延長7.5km、幅300m、高さ15mの砂丘（小清水原生花園）によって堰き止められ、流れは北西端の狭い水路を経てオホーツク海に注いでいる。北岸と丸万川河口は牛馬の放牧地となっており、南岸は標高20m前後の丘陵地で、畑作や牧草地である。北浜には

図1. 調査地域



冬期にオオハクチョウを餌付けしている「白鳥公園」があり、春～秋にかけて、公園前方に小規模の干潟が出現し、シギ・チドリ類の飛来地となっている。白鳥公園から約1km東方には、湖と水路に囲まれた中島があり、この周辺にも小規模の干潟が出、ガン・カモ類、シギ・チドリ類が飛来する。平和橋から東の浦士別湾は淡水度が高く、周囲を広大なヨシ原が囲み、チュウヒやカモ類が観察される。小清水原生花園はセンダイハギやヒオウギアヤメ等の植物群落が見られ、ホオアカやノビタキ、センニュウ類等が繁殖する。

今回は、1994年8月～1996年12月までの観察記録を表にまとめ、報告する。

・止別海岸周辺

今回は、止別川河口～J R 止別駅北側までのオホーツク海沿岸と、止別川河口南側に広がる牧草地、および河口から500m程度上流までの止別川流域に、小清水原生花園沿岸のオホーツク海を加えた地域を総称して止別海岸周辺と呼ぶことにする。この地域のオホーツク海沿岸は砂浜が続いており、海上にはピロードキンクロ等が観察される。背後には小清水原生花園とほぼ同様の砂丘が伸びており、ここではアカモズ、ホオアカ、ノビタキ等、草原性の鳥類が繁殖している。止別川河口南側の牧草地は、春・秋期に飛来する、ガン・ハクチョウ類の重要な採餌場となっている。

今回は1994年8月～1996年12月までの観察記録を表にまとめ、報告する。

・斜里漁港周辺

斜里漁港は斜里市街の北西に位置し、斜里川河口とは堤防を挟んで隣接している。斜里川河口との境界である堤防は、東にやや長く伸び、港口付近に連続する2,3の堤防との相乗効果により、流水の流入が殆ど見られず、港内が完全に結水することも少なく、冬期にはスズガモが100羽ほど越冬する。周辺は砂浜の海岸であり、春・秋期にはハマシギ等が観察される。斜里川河口は左岸・右岸共に河口部から堤防が伸び、狭い河川敷にはアカザやマツヨイグサ等がまばらに生え、冬期にはベニヒワ等がその種子に群がる。河口部から約500mほど上流にはサケマス捕獲場があり、今回はここまでの観察・報告の範囲とした。

今回は1995年11月～1996年6月上旬、および1996年10月～1997年2月までの観察記録を表にま

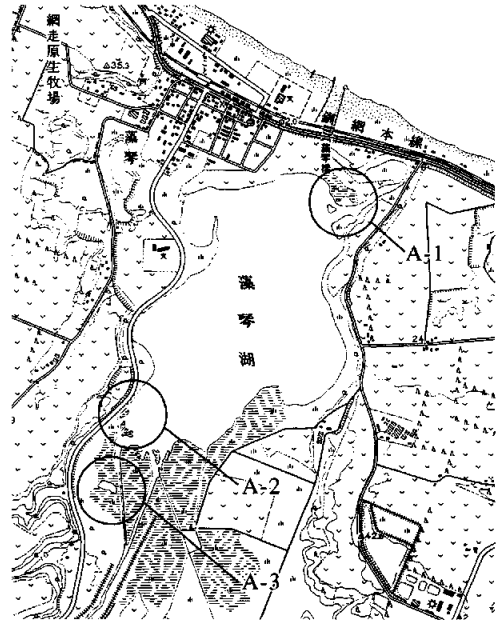


図2. 藻琴湖における調査地点

とめ、報告する。

なお、全ての地域において、ドバトは表から除外した。

方法

いずれの地域においても、移動には自動車を使用し、各地域それぞれをできる限り隈無く廻って観察の結果を野帳に記録した。藻琴湖においては主にA-3地点において観察を行い、A-3が結水している時期にはA-1で観察した。A-2はA-3への移動の際に通過する地点である（図-2参照）。観察には10倍の双眼鏡と30倍のフィールドスコープを使用した。個体数が多い種については10, 50, 100…の枠で区切っていき、おおよその個体数を把握するよう努めた。

結果

今回の期間（1994年8月～1997年2月）中、5地域合計で201種の鳥類（他、死体確認が1種）が観察された（表参照）。地域別では、網走港およびポンモイ海岸では51種、藻琴湖周辺では73種、溝沸湖・小清水原生花園周辺では154種、止別海岸周辺では112種、斜里漁港周辺では101種（他、死体確認1種）が観察された（表参照）。

以下に、今回観察された鳥類中、特筆すべきものを挙げ、解説する。

・フルマカモメ（1）：筆者が地元在住の野鳥観察者数名から聞いたところによれば、宇登呂港か

ら出航し、知床岬まで回遊する遊覧船上からは、夏期に本種の大群が見られるようである。しかし、比較的近距离であるにも関わらず、これまでに小清水町の海上では本種の大群が観察されたことはなかった。今回の調査では主に11月～12月の間、止別海岸において毎年数羽が観察されたのみである。また、網走市の海上においては全く観察されなかった。

・*Puffinus*属 (2,3) : 止別海岸周辺、および斜里漁港周辺においては、ハイイロミズナギドリとハシボソミズナギドリの2種が観察された。これらは5月初旬～12月初旬と長期間にわたって観察されたが、個体数は8月初旬～11月下旬にかけての時期に多かった。この2種の野外識別は容易ではなく、観察条件によっては同定が困難な場合もあったため、無理な識別を避けて「*Puffinus*属1種」と記録することも多かった。確実に「額部の突出具合」、「嘴の長さ」、「翼裏面のパターン」等の相違点 (Harrison, 1985) を確認でき、同定できたものでは、ハシボソミズナギドリが大半を占めた。しかし、ハイイロミズナギドリも少なからず観察され、これらのことからこの地域における本属の飛来状況については未だ解明の余地があるものと思われる。なお、1996年5月18日には斜里漁港の沖合において、2万羽を越える*Puffinus*属1種が観察されたが、この時も観察条件が悪く、種の確実な同定は不可能であった。

・ハイイロウミツバメ (4) : 11月中旬～12月初旬にかけて、10～30羽程度の小群が網走港内湾において観察された。

・アビ類 (5～8) : 網走港～斜里漁港までの海岸では、日本産アビ類4種全てが観察された。これら4種は一般的に本邦では冬鳥とされるが、アビ、オオハム、シロエリオオハムの3種は夏期にも少数が継続的 (アビは稀) に観察された。このことから、オオハム、シロエリオオハムの2種は、この地域の海上において、少数が越夏することが示唆される。ハシジロアビは冬鳥として飛来するが個体数は非常に少なく、観察されない年もある。近年では1995年11月16日に、止別川河口において10羽前後の個体が観察された。本種は単独で観察されることが多いが、この時は2,3羽の小群が幾つか観察された。

・カイツブリ (9) : 一般的に北海道では夏鳥 (藤

巻, 1986) とされるが、1994年12月下旬～1995年1月初旬には、止別川下流部において越冬している3羽が観察された。また、佐々木 (1990)、斎藤 (1996) は本種の移動型を夏鳥としているが、斎藤は2月の記録も記載しており、筆者も近年、網走川下流部において5羽前後の個体を厳冬期に観察していることなどから、結氷しない河川や湖沼等においては本種も越冬する事が示唆される。なお、藻琴湖と濤沸湖においては、1995/96年に繁殖が確認された。

・カムリカイツブリ (12) : 小清水町の海上では10月下旬～12月初旬にかけて、毎年少数が観察される。筆者はこれまでに小清水町以外において本種を観察したことはないが、知床半島先端部においても記録されており (中川, 1982)、網走市の海上でも観察されている (斎藤, 1996) ため、広くこの地域全体の海上に飛来しているものと思われる。

・ウ類 (14,15) : ウミウ、ヒメウともに海上において生活する種であるが、1995/96年の夏期にはウミウ数羽が濤沸湖内 (湖口に近い白鳥公園～丸万川河口) において観察された。また、両種ともにこの地域では周年観察されるが、特にヒメウは個体数が多く、網走市を中心とした地域では、秋～初冬にかけての時期に数万～数十万羽の大群が観察された。また、斜里漁港周辺においては、11月下旬～3月下旬までの冬期には普通であるが、それ以外の時期には稀であり、他の地域においても、夏期に個体数が著しく減少する傾向が見られた。これらに加え、知床半島沿岸で観察されるヒメウの多くは、千島列島や樺太で繁殖し、南下してきたものであると考えられている (中川, 1988) こと、また、知床半島沿岸では繁殖はまだ確認されておらず (中川, 1988)、佐々木 (1990) や斎藤 (1996) にも繁殖の記載がないこと等から考えると、この地域におけるヒメウの総体的な移動型は冬型であり、一部の個体が越夏するものと思われる。逆に、ウミウは斜里漁港周辺では4月上旬～10月下旬までの間は普通に観察されるが、冬期には稀であった。これは、中川 (1988) の「知床へのウミウの渡来は例年4月上旬」と一致し、網走港や止別海岸においても同様の傾向が見られたことなどから考えると、ウミウの総体的な移動型は夏型であると思われる。

・シラサギ類 (17,18) : 本報告では山階 (1986) に従い、ダイサギをシラサギ属 *Egretta* ではなく、アオサギ属 *Ardea* としたが、ここでは便宜上、ダイサギとシラサギ属 (チュウサギ、コサギ等) とをまとめて「シラサギ類」として扱う。これまでに網走支庁管内では4種のシラサギ類 (ダイサギ、チュウサギ、コサギ、カラシラサギ) が記録されている (日本野鳥の会北見支部, 1996)。筆者が知る限り、藻琴湖と濤沸湖においてはカラシラサギを除く3種が記録されており、中でもダイサギとチュウサギは少数ながら、毎年、主に春期に観察される。1996年4~5月には、藻琴湖 (A-2地点) でチュウサギ2羽、濤沸湖でダイサギ1羽、チュウサギ1羽が観察された。これまでの観察では、春期に飛来した個体は、1日限りか、長くても数日間のうちに飛去する傾向が見受けられた。なお、筆者がこれまでに春期の濤沸湖において観察したダイサギは、全ての個体に「アオサギと同大か、やや大きい」、「趾の裏が黄緑色」等の特徴が認められたことから、西南シベリア以西の大陸で繁殖し、日本には冬鳥として飛来する (原鳥, 1991) 亜種オオダイサギ (*A. alba alba*) と思われる。このため、濤沸湖は本州以南で越冬した本亜種の、北帰行の際の中継地として利用されていることが示唆される。斎藤 (1996) は、ダイサギの移動型を漂行型に分類しているが、これは筆者には疑問である。

・ミサゴ (19) : 濤沸湖においては、春・秋期に少数が通過する旅鳥である。秋期には同湖の丸万川河口周辺に、数日~数週間滞在する個体も見られる。

・オオワシ (22) : 本種は冬鳥として渡来する (藤巻, 1986) が、濤沸湖では夏期にも観察されることがある。近年では1995年8月6日に幼鳥1羽、1996年8月24日に亜成鳥1羽が観察された。

・ハイイロチュウビ (23) : この地域では、主に濤沸湖において、秋~初冬にかけて度々観察されることから、毎年、秋期に少数が飛来する旅鳥であると考えられる。1995年の秋期には濤沸湖において、10月15日以降、雌あるいは幼鳥と思われる2羽が、約1ヶ月間継続的に観察された。近年の濤沸湖以外での記録は、1994年12月27日に止別川河口周辺にて、雌成鳥と思われる1羽、1996年11月6日にJR浜小清水駅近くの海岸砂丘にお

いて、雌成鳥と思われる1羽、がある。

・チュウビ (24) : 濤沸湖では春~初冬にかけて、主に平和橋から東側の浦士別湾において複数羽が観察された。濤沸湖畔のヨシ原では、昭和39,41年に繁殖したとされており (日本野鳥の会小清水支部, 1987)、現在も繁殖している可能性が高いと思われる。

・ツミ (25) : この地域では低地~山地の森林、また冬期には市街地等でも観察される種であるが、海岸部においては1996年2月17日に網走港 (網走川河口) において、ドバトの群を襲う雌成鳥1羽が観察されたのみである。

・コブハクチョウ (32) : 1995年5月6日に、濤沸湖において成鳥2羽が観察された。この2羽は同湖北西端の白鳥公園と、南東端の浦士別川河口とを行き来し、8日までの3日間継続的に観察された。北海道で見られるものは、大沼公園で飼育されていたものがウトナイ湖や洞爺湖に分布し、繁殖しているものとされる (藤巻, 1986) が、濤沸湖で観察されたものがこの系統であったかは不明である。

・コハクチョウ (34) : 玉田 (1987) によると、「濤沸湖を利用している白鳥の大部分はオオハクチョウであって、コハクチョウは極めて少数羽を見るに過ぎない」とされ、この飛来状況は筆者が知る限り1994年まで続いた。しかし、1995年の秋期には濤沸湖において多数 (最大時11月7日、500羽前後) 観察され、以降、この地域各地において、少数ながら比較的よく観察されるようになった。濤沸湖以外における観察には、1996年2月3日に斜里川河口において、成鳥5羽・幼鳥2羽、1996年3月29日に藻琴湖 (A-1地点) において、成鳥3羽・幼鳥1羽、等がある。1996年の秋期には前年ほどの大群は飛来しなかったものの、やはり各地で数羽~十数羽単位の小群が観察され、本種の飛来数は徐々に増加しているか、もしくは安定期に向かう傾向にあると思われる。

・ヒシクイ (35) : ヒシクイ5亜種 (*fabalis*, *rossicus*, *serrirostris*, *johanseni*, *middendorffii*) のうち、日本に飛来するのは亜種ヒシクイ (*Anser fabalis serrirostris*) と、亜種オオヒシクイ (*A. f. middendorffii*) の2亜種であり、濤沸湖や能取湖に飛来するヒシクイは亜種ヒシクイである (池内, 1997) とされる。しかし、濤

沸湖においては亜種オオヒシクイも毎年、秋期にごく少数が観察される。1995年は観察する機会が多く、9月初旬から時折観察され、10月30日、および11月3日には標識鳥（番号は確認できず）が1羽観察された。

・マガン（36）：この地域において普通に観察されるガン類はヒシクイであるが、本種も毎年（春／秋とも）、数羽～十数羽がヒシクイ群中に混在する形で観察される。

・コクガン（37）：網走港内湾、およびポンモイ海岸において、幼鳥3羽が1996年1月中旬から約1ヶ月間、不定期に観察された。また、1996年4月10～22日には、止別川河口南側に広がる牧草地において、幼鳥1羽が500羽前後のヒシクイ群中に混在し、牧草を採餌する姿が観察された。本種は、北海道東部には秋に5000羽程が飛来する（呉地、1989）ことが知られているが、本種の記録は日本野鳥の会小清水支部（1987）、中川（1988）、佐々木（1990）のいずれにも記載されておらず、筆者自身の観察例が少ないことから、この地域においては稀に飛来すると考えられる。

・オシドリ（38）：1996年2月28日～3月11日までの間、マガモ数百羽の群中に混在する雄1羽が、流水の浮かぶ斜里川河口において不定期に観察された。中川（1988）によれば、本種が知床半島に飛来するのは5月初旬であることから、今回の観察は北帰行の際の記録であれば極めて早い記録であると思われる。

・アメリカヒドリ（40）：本種は、藤巻（1986）では「北海道では極めて稀」とされ、佐々木（1990）も本種の個体数を「稀」と記載しているが、濤沸湖においては毎年、春・秋期に数羽～十数羽が観察される。このため、この地域においては毎年少数が飛来する旅鳥と考える方が妥当であると思われる。ヒドリガモの群中に混在している場合が多いが、単独で観察される場合もある。なお、ヒドリガモの群中には、ヒドリガモとアメリカヒドリ、両種の特徴を併せ持つ、雑種と思われる個体も多く見られた。

・ヨシガモ（41）：この地域では春・秋期に普通に観察され、それ以外の時期には個体数が著しく減少する旅鳥である。しかし、濤沸湖や藻琴湖においては夏期にも複数羽が観察される場合があり、佐々木（1990）によって、網走地方における繁

殖の可能性が示唆されている。本種は知床半島の羅臼湖では繁殖しており（中川、1988）、濤沸湖や藻琴湖においても繁殖する可能性は高いと思われる。厳冬期には極端に個体数が減り、近年では1996年1月以降、網走港・ポンモイ海岸において越冬する、雄成鳥数羽が観察されているのみである。

・オカヨシガモ（42）：1995/96年の2年連続で、藻琴湖（A-3地点）において、雌成鳥の後について移動する幼鳥（巣立ち後1週間前後）が観察された。同地点では2,3番いが繁殖し、1番いにつき、5～10羽前後の幼鳥を連れていた。また、濤沸湖においても、親鳥が巣立ち後間もない幼鳥を連れて移動している姿が毎年普通に観察された。浦士別湾・平和橋付近では、こうした移動がいたるところで観察され、少なくとも10番いは繁殖していると思われる。なお、中村（1986）は、「北海道では少数繁殖しており、濤沸湖では近年増えてきている」としているが、日本野鳥の会小清水支部（1987）は、「ごく少数濤沸湖畔で繁殖しているらしい」と記載するに留まり、佐々木

（1990）も網走地方での繁殖を確認していない。本種の雌、および非生殖羽の雄は、マガモの雌と類似しており、マガモと混同されている可能性も否定できないものと思われる。1996年1月中旬～2月中旬にかけて、主にポンモイ海岸において、雄2羽、雌1羽が継続的に観察された。斎藤

（1996）は1,2月の観察記録を挙げているが、恐らく、筆者が観察したものと同様であると思われる。厳冬期のこの地域において、本種が観察されるのは稀と思われるため、詳細を記した。

・トモエガモ（43）：1997年2月23日に、斜里川河口において雌1羽が観察された。数十羽のマガモの群に混在しており、流水上で休む姿も観察された。中川（1988）には本種が記載されていないことから、これが斜里・知床半島における初記録であると思われる。

・コガモ（44）：日本において普通に観察されるのは、基亜種コガモ（*Anas crecca crecca*）であるが、濤沸湖ではこれまで、春・秋期に度々（1996年9月21日、他）亜種アメリカコガモ（*A.c.carolinensis*）も観察された。

・マガモ（45）：藻琴湖（A-3地点）では、1995/96年の2年連続で巣立ち直後の幼鳥が多数観

察され、濤沸湖においても同様に幼鳥が観察された。これら2湖沼では、相当数が繁殖しているものと思われる。この地域では、本種の群が海上で観察されることも珍しくないが、特に斜里漁港周辺の海上では数百～数千羽の大群が観察されることがあり、1996年12月12日には1万羽を越す大群が観察された。このような群は海上が荒れ、他の海ガモ類、アビ類等が港内へ一時的に避難するような場合でも、海上に留まる傾向が見受けられた。

・カルガモ(46)：藻琴湖(A-3地点)において、1995/96年の2年連続で、巣立ち直後の幼鳥が観察された。同地点では少なくとも2番いが繁殖したと思われる。

・クビワキンクロ(51)：1994年12月18日に、斜里川において雄成鳥1羽が確認され(中川, 1995)、以降、斜里漁港周辺部には1996/97年の冬期現在まで、同一個体と思われるものが毎冬来し、越冬している。同地においては1994年3月8日にも雄成鳥1羽が写真撮影されている(謝花, 1995)ため、同一個体が以前から同地に飛来・越冬していたことが示唆される。本種はスズガモ50～100羽とキンクロハジロ5羽前後で構成された群中に混在している場合が多いが、スズガモ、あるいはキンクロハジロ数羽と小群を作り、本群から離れて行動している場合もあった。1996年には、2月21,24両日にそれぞれ一度ずつ、キンクロハジロの雌に対して求愛行動(ヘッドスロー・ディスプレイ)を行う姿が観察されたが、番いは形成されなかった。しかし、3月上旬から終認日の5月17日まで、スズガモの雌1羽と常に行動を共にするようになったため、このスズガモ雌と番いを形成したと思われる。なお、本種は1995年2月25日に網走港(網走川河口部)において、雄成鳥1羽が観察されている(舟生憲幸, 私信)が、同日、斜里漁港周辺は流水の接岸と港内および斜里川下流部の結氷により開水面が無くなったために、斜里漁港で越冬していた個体が網走港に一時的に移動し、それが観察されたものと思われる。斎藤(1996)は網走港(川)において1月に観察されたと記載しているが、筆者が知る限り、これまでのところ、上記の記録以外に網走市での確実な記録はないと思われる。

・ハジロ属*Aythya*中間個体(未表記)：1996年4月5,6両日、藻琴湖(A-3地点)において、キンク

ロハジロ70羽前後の群中に混在する、コスズガモ(*A. affinis*)雄に酷似した1個体が観察された。この個体は、「キンクロハジロ大」、「嘴が小さめ」、「冠羽が認められる」、「頭部には紫色光沢がある」、「上面の縞がスズガモよりも太い」、等の特徴(Lewingtonら, 1991、およびSonobeら, 1993)から、一見してコスズガモの雄と思われたが、「冠羽がコスズガモよりもやや長め」、「嘴爪の形状がキンクロハジロ的」の2点ではコスズガモ雄と異なっていた。また、同地点では同年5月17日にも、コスズガモ雄に類似した個体が観察されたが、この個体についても「嘴爪の形状がキンクロハジロ的」という、コスズガモ雄とは異なる特徴が認められた。さらに、同年5月11日には、河口部から200m程上流の斜里川において、キンクロハジロ約60羽、スズガモ約50羽、クビワキンクロ雄1羽から成るハジロ属の群中に混在する、コスズガモ雄と類似した個体1羽が観察された。この個体は「頭部に短い冠羽がある」、「上面の黒色帯(縞)がスズガモよりも明瞭に太い」等の特徴ではコスズガモの雄と類似していたが、「頭部に緑色光沢がある」、「嘴爪の形状がキンクロハジロ的」、「スズガモとほぼ同大」等の、コスズガモ雄と一致しない特徴が認められた。カモの仲間は鳥類の中でも例外と言えるほど頻繁に交雑が起こり、雑種を生じ、キンクロハジロ、スズガモ、ホシハジロの組み合わせからはコスズガモに似た雑種を作り出す(金田, 1991)ことが知られており、筆者が観察した3個体はいずれも、Harrisら(1989)、および金田(1991)により、ハジロ属の中間個体であることが示唆された。また、この3個体には「上面の黒色帯はスズガモよりも明瞭に太い」という特徴が見られたことから、金田(1991)により、スズガモとキンクロハジロとの中間個体である可能性が高いことが示唆された。

・クロガモ、ビロードキンクロ(56,58)：これら2種は、日本では一般的に冬鳥とされるが、斎藤(1996)の記載にあるように、この地域の海上では越夏する個体も多く観察される。1995/96年の夏期(6～9月)、小清水町止別海岸においては、両種ともに数羽～数十羽の群が点在して見られたが、個体数としてはクロガモの方がやや多い傾向が見られた。

・アラナミキンクロ (57) : 1995年2月23日～3月1日までの7日間、網走港(網走川河口部)において、雄成鳥1羽が継続的に観察された。同時期、流水が網走港周辺に接岸し、港内湾の大部分も氷結したために、周辺にいた海ガモ類(ピロードキンクロ、シノリガモ等)が網走川河口部に僅かに残った開水面に集結する状況にあり、本種もそれら海ガモ類の群中に混在しているところを発見された。本種はピロードキンクロの小群と行動を共にしている様子が見受けられた。

・ミコアイサ (60) : 1995年6月19～21日に、藻琴湖(A-3地点)において、雄成鳥1羽が観察された。この個体には特に外傷は見られず、普通に飛翔可能であった。サロベツ原野の沼では少数が繁殖する(藤巻, 1986)とされるが、この地域において、本種が夏期に観察されることは稀であり、今回の記録の前後に雌や幼鳥の姿が観察されなかったことから、この記録が繁殖に結びつく可能性は低いと思われる。

・ウズラ (63) : 1995年9月2日に、濤沸湖畔の草原において1羽が観察された。佐々木(1990)は網走地方へは夏鳥として少数が飛来し、繁殖すると示しており、過去には知床岬(中川, 1988)や濤沸湖(小川ら, 1975)での記録があるものの、近年では夏期の確実な観察例はないものと思われる。斎藤(1996)は本種の移動型を夏型と記載しているが、観察は9,10月のものであり、今回筆者が観察した個体についても、時期的に見て、渡り途中の個体であった可能性も否定できないものと思われる。

・ナベヅル (64) : 日本では鹿児島県出水平野や山口県八代、高知県中村市に飛来し、これらの地方では普通に観察されるが、北海道では記録が少なく、藤巻(1986)では迷鳥とされている。しかし、1996年の春期には渡鳥管内知内町など、道南、道央各地で合計50羽ほどが確認された(1996.5.2.北海道新聞)。同時期である、1996年4月27日には、濤沸湖・丸万川河口付近において、西から東南へと飛んで行く5羽の小群が観察されており、道南・道央で観察されたものの一部であった可能性も考えられる。

・クイナ (65) : 濤沸湖では、白鳥公園から約1kmほど東に位置する中島に隣接した小さなヨシ原において、1995/96年の2年連続で成鳥と幼鳥が

観察された。藻琴湖では、1996年5月17日に、A-3地点において成鳥1羽が観察され、以降数回、本種と思われる声が聞かれた。これらの事例から同地点においても繁殖している可能性が高いと思われる。

・セイタカシギ (67) : 小清水町止別のニクル沼周辺の湿地ではほぼ毎年見られ、数も1羽から2羽へと増えた(日本野鳥の会小清水支部, 1987)とされるが、近年は特に濤沸湖周辺における個体数の増加が著しい。濤沸湖では春期に観察され、1995年には3羽、1996年には最大時で10羽が観察された。1996年5月6～8日には、斜里川河口においても雌1羽が観察されたが、この個体は頭部の模様等から、5月5日までニクル沼周辺で観察されていたものと同一個体であったと思われる。なお、1988年5月30日には中斜里地区において5羽が記録されており(中川元, 私信)、この記録が斜里町における最初の記録であると思われる。

・ソリハシセイタカシギ (68) : 1995年11月10日に、濤沸湖・白鳥公園において1羽が発見されたが、この個体は湖の一部が凍り始めても飛び去ろうとはせず、26日までの17日間滞在した(川崎, 1996)。道内では他に、1994年5月28日～6月2日の苫小牧市弁天海岸における1例(佐藤, 1995)しか記録されていないものと思われる。

・ハジロコチドリ (71) : 佐々木(1990)によると、1977～1989年の間、網走地方における観察例は一度のみであるが、1995年以降は濤沸湖(白鳥公園)において、春・秋期の渡りの時期に必ず観察された。単独で観察される場合が多いが、1996年の秋期には9月3～12日までの間、2羽が継続的に観察された。本種はこれらのことから、この地域では数少ない旅鳥として毎年飛来する種であると思われる。

・コチドリ (72) : 1995年の夏期に、藻琴湖(A-3地点)において、巣立ち直後と思われる幼鳥が観察された。当時、A-3地点には狭い砂州が残っており、そこで繁殖したのと思われる。しかし、翌シーズンにはこの砂州が消失したために、繁殖はおろか、本種の観察例自体が激減した。この砂州消失はA-3で進められている工事の影響とも考えられる。

・カラフトアオアシシギ (84) : 佐々木(1990)によると、1977～1989年の間、網走地方では1



度観察されたのみであり、中川（1988）には記載されていないこと等からも、本種はこの地域ではごく稀な種であることが示唆される。近年では1994年10月1日に、濤沸湖（白鳥公園）において1羽が観察された。なお、斎藤（1996）は8,10月の、濤沸湖における記録を挙げているが、10月の記録は上記のものと同じである。貴重な記録と思われるため、今回、ここにその詳細を記した。

・オジロトウネン（98）：藤巻（1986）では「極めて稀」とされ、佐々木（1990）も「稀」と記載しているが、筆者は以前から濤沸湖において数度観察しており、1995/96年にも観察された。1996年5月には同湖・白鳥公園に隣接した「ドサンコ花園牧場」前の湿地帯において、8日から17日までの間、継続的に観察され、9,10両日には5羽の小群が観察された。また、本種は能取湖等においても度々観察されており、これらのことから、この地域においては稀な種ではなく、毎年、少数が飛来する旅鳥であると考えられる。

・アメリカズラシギ（100）：佐々木（1990）によると、網走地方では秋期に稀に観察される種であるが、1996年秋期の濤沸湖では比較的多数の個体が観察され、10月14日には3羽が観察された。

・ハマシギ（102）：佐々木（1990）では春・秋期に飛来する旅鳥とされるが、斎藤（1996）が「周年観察可」と記載しているように、網走港（網走川河口）においては、毎年、厳冬期にも度々小群が観察され、同地域において越冬していることが示唆される。

・トウゾクカモメ類（107～110）：近年、止別海岸において日本産トウゾクカモメ類4種全てが観察された。オオトウゾクカモメは1996年11月8日に、JR止別駅北側の海岸において1羽が、シロハラトウゾクカモメは1995年8月2日に、止別川河口において成鳥2羽が観察された。トウゾクカモメ、およびクロトウゾクカモメは、8月初旬～初冬にかけての時期に、止別海岸だけではなく、この地域全域の海上において普通に観察された。

・ゾウゲカモメ（111）：1996年1月21日に、斜里漁港において第一回冬羽の個体1羽が観察された（川崎，1996）。中川（1988）には本種の記載がなく、これが知床半島における初めての記録であると思われる。

・ホイグリンカモメ（114）：1995年10月8日、

止別海岸（止別川河口）において、「足が黄色いセグロカモメ」2羽が、オオセグロカモメやウミネコから構成された80羽ほどのカモメ類の群中に混在しているところを観察された。この2羽は、「オオセグロカモメよりやや小さい」、「上面の色はセグロカモメよりも濃く、ウミネコやオオセグロカモメに近い色」、「体は細身であり、静止時には初列風切が尾端より長く突き出、姿勢はより水平」、「脚は鮮黄色」、「嘴は細短い」「頭部は小さく、丸い」等の特徴が認められた。同地点では、翌1996年10月20日にも同様の特徴を持つ1羽が観察された。また、1996年9月23日には、斜里漁港周辺において「足が黄色いセグロカモメ」数羽が観察され、その中に同様の特徴を持つ1羽が観察された。斜里漁港周辺においては、同年10月16～27日までの間に、上記の特徴を持つ個体が30羽ほど観察された。これらは先に挙げた特徴から、ホウゲンドウルンら（1996）に記載されている、ホイグリンカモメ（*Larus heuglini*）の亜種、*taimyrensis*であると思われる。なお、斜里漁港においては、ホイグリンカモメとセグロカモメ（*L. argentatus vegae*）の特徴を併せ持つ個体も他に20羽ほど観察されたが、これらはホイグリンカモメとセグロカモメとの中間個体である可能性も考えられる。また、Grant（1986）、Harrisら（1996）、およびホウゲンドウルンら（1996）には、「（典型的な）*taimyrensis*の虹彩は淡色である」と記載されているが、1996年に斜里漁港において観察された個体のうち、虹彩が淡色であったのは一部であり、大部分の個体の虹彩は暗色であった。しかし、少なくとも本種の分布の東の方では、むしろ虹彩が暗色の個体の方がずっと多いのではないと思われる（森岡照明，私信）ことを考慮に入れると、*taimyrensis*とする同定に問題はないと思われる。本種は（中間個体の可能性があるものも含めて）セグロカモメの群中に混在し、行動を共にしており、斜里漁港への飛来と飛去のタイミングはセグロカモメと一致していた。今回の飛来状況から、本種はセグロカモメの群中に混在し、渡りの時期にこの地域を定期的に通過しているものと思われる。なお、本報告では分類等を山階（1986）に従ったが、「以前は*heuglini*（ホイグリンカモメの基亜種）と*taimyrensis*は広義のセグロカモメ（*L. argentatus*）の亜種か、ニシセ

グロカモメ (*L.fuscus*) の亜種として扱われてきたが、最近では、種としてセグロカモメともニシセグロカモメとも異なっていると考えられ、独立種ホイグリンカモメ (*L.heuglini*) として扱われてきている」(ハウゲンドウルンら, 1996) ことを踏まえ、*taimyrensis* を「ホイグリンカモメの一亜種」として記載した。

・セグロカモメ (115) : 本種は約10亜種に分けられ、日本に飛来する亜種は *L.a.vegae* であるが、北米産亜種 *L.a.smithsonianus* とと思われるものも少数飛来する (氏原・氏原, 1992)。亜種 *smithsonianus* には、上面が亜種 *vegae* より明らかに淡色で、シロカモメに近い濃度であり、虹彩は黄白色で眼瞼は黄色、または橙黄色等の特徴がある (氏原・氏原, 1992)。この亜種 *smithsonianus* とと思われる個体は、これまでに斜里漁港において2度 (1996年2月15日, 第2回冬羽1羽, 1997年1月9日, 成鳥冬羽1羽) 観察された。なお、

佐々木 (1990) は本種の移動型を冬型と記載しているが、筆者のこれまでの観察では、この地域全域で場所を選ばず、厳冬期に本種が観察されることは稀であり、港湾等で越冬した場合にも単独か、多くて数羽である。このことから、本種は春・秋期の渡りの時期にこの地域を通過する旅鳥であると考えられ、移動型は旅型とする方が妥当と思われる。

・ワシカモメ (117) : 本種は冬鳥として飛来する種である (藤巻, 1986) が、濤沸湖 (白鳥公園) では近年、夏期にもしばしば観察されている。筆者のこれまでの観察では、観察されたのは特に外傷はなく、普通に飛翔可能な成鳥夏羽の個体であった。

・ヒメケビワカモメ (120) : 1995年12月3日に、網走港において成鳥1羽、第一回冬羽2羽が観察された (川崎, 1996)。また、その翌日の12月4日には、斜里漁港において第一回冬羽3羽が観察され、以降、17日までの14日間継続的に観察されたが、この間、成鳥は3羽前後、第一回冬羽の個体は10羽前後飛来していたと思われる (川崎, 1996)。斜里漁港では翌シーズンの1997年1月4日にも成鳥3羽が観察された。いずれも記録も、初認日は強い北西の風が吹く、大荒れの天候状況であったが、1995年の斜里漁港における記録では、天候が回復した後も約2週間に渡って滞在したた

め、本種の飛来は天候状況に影響される場合が多いとしても、必ずしも一時避難的なものではないことが示唆される。また、中川 (1987) は本種の飛来が海水の存在と密接な関係にあることを示唆したが、今回のいずれの記録についても、当日、付近の海上には海水が一切認められなかったことから、海水の動きと無関係に飛来する場合も多いものと思われる。なお、本種は1974年以降、しばしば北海道に飛来しており (氏原・氏原, 1992)、その観察頻度から考えて、この地域を含む、オホーツク海沿岸地域には毎冬、少数が飛来しているものと考えられる。厳冬期の海岸を定期的に観察する者が増えれば、それに伴い、本種の観察例も増加するのではないかと思われる。

・ハジロクロハラアジサシ (122) : 1996年5月16~18日に、濤沸湖 (主に浦士別湾) において、成鳥夏羽1羽が観察された。同地点では、同年9月1,2日にも、第一回冬羽へ換羽中のものと思われる2羽が観察された。また、同年5月23日には、斜里川河口においても第二回夏羽の個体1羽が観察された。この個体は「頭部、および体が (やや褐色みを帯びた) 鈍い黒色」、「下雨覆に白色斑が認められる」、「初列風切 (特にP3-5) の暗色帯が、成鳥羽の個体よりも広い」等の特徴が認められたため、Olsenら (1995) に従い、第二回夏羽として問題はないと思われる。なお、本種は春と秋に、稀な旅鳥として飛来する (藤巻, 1986) とされるが、濤沸湖~斜里漁港にかけての比較的狭い範囲内で1年間に計3度・4羽が記録されたことから、この地域へは数少ない旅鳥として毎年飛来している可能性もあるものと思われる。

・ウミスズメ類 (124~132) : 近年、この地域で観察されたウミスズメ類について、簡単な解説をする。ハシブトウミガラスとウミガラスは冬期には普通に観察され、各港湾内においても普通である。ウミバトは毎冬、ごく少数が観察される種であり、近年では1994年11月17日に小清水原生花園において2羽、1996年1月4日に網走港において1羽、同年11月29日にJR止別駅北側の海岸において1羽が観察された。ケイマフリは斜里町・ウトロの海上では夏期にも観察されたが、網走市~斜里漁港にかけての海上では夏期に観察されることは稀であった。冬期には各港湾内において、普通に観察された。マダラウミスズメは小清水町

の沿岸では夏期にも少数が観察された。1996年の夏期には3度ほど観察されたが、いずれも岸から10～15mほどの至近距離であった。筆者はこれまでも小清水町の沿岸において、夏期に度々本種を観察しているが、通常は岸から100mほどか、それ以上沖合におり、これほどの至近距離で観察されたことはなかった。なお、本種は秋～流水接岸までの期間には斜里川河口や網走港内湾において少数が観察された。ウミスズメは秋～流水接岸までの間、網走港と止別海岸、斜里川河口において観察され、前2地域では数羽～十数羽が観察されたのみであったが、斜里川河口においては比較的多数が観察され、11月初旬には20～40羽の群が度々観察された。エトロフウミスズメは1995年12月27日に、斜里漁港において比較的新しい死体を1体確認した。筆者は、この地域ではこれまで、確実に本種と同定される個体を観察した例はない。コウミスズメは止別川河口において1994年11月20日に1羽、同年12月14日に10羽前後、斜里川河口において1997年1月14日に1羽が観察された。ウトウは止別海岸において、1995/96年の2年連続で、6月下旬～10月上旬にかけての間、数十～百羽以上の群が継続的に観察された。日本野鳥の会小清水支部（1987）では、本種の移動型を夏型と記載しているため、この現象は以前から観察されていたものと推測される。斜里川河口においては、1996年10月初旬に多く観察され、特に10月9日には500羽を越す大群が観察された。

・アオバト（134）：濤沸湖では、1995/96年の2年連続で、夏期に10～40羽前後の群が丸万川河口東側の湖岸に降りて、湖水を飲む行動が観察された。本種が海水を飲むことは一般に広く知られているが、この行動が同湖への海水の流入とどの様に関係しているのかは不明である。

・カワセミ（140）：藻琴湖（A-3地点）において、1996年の夏期に1番いの繁殖が確認された。また、同地点において観察された成鳥の個体数から、さらに別の1番いが繁殖していた可能性が示唆された。同地点では1995年の夏期にも成鳥数羽が継続的に観察されており、数年連続で繁殖した可能性が高いと思われる。しかし、同地点では現在、工事が行われており、今後、その影響が懸念される。

・ツバメ（148）：濤沸湖（平和橋付近）において、1996年5月26日に1羽が観察された。佐々木

（1990）には本種の記載がなく、中川（1988）からは知床半島での観察記録が少ないことが示唆されるが、筆者は1995/96年の2年連続で、小清水町ニクル沼において本種を春期に観察しており、この地域では少数が渡りの際に通過、あるいは繁殖していると思われる。なお、斜里市街では1984年に繁殖が確認されている（中川、1988）。

・ツメナガセキレイ（149）：1996年9月1日に、濤沸湖（白鳥公園）において、亜種キマユツメナガセキレイ（*Motacilla flava taivana*）1羽が観察された。時期的に渡りの途中であった可能性が高いが、環境面から見て、濤沸湖畔において繁殖している可能性も否定できないものと思われる。

・オオモズ（155）：1991～1993年には止別川河口周辺に毎冬1羽が飛来し、越冬していたが、近年は冬期に観察されることがなく、北帰行途中と思われるものが春期に観察されるのみである。近年では1996年4月18日、同年5月16日に、それぞれ1羽が観察された。本種がサハリンの繁殖地に渡来するのは4月～5月初めである（ネチャエフ、1996）ため、後者は渡りに遅れた個体であると思われる。浜頓別では繁殖の記録があり（藤巻、1986）、佐々木（1990）も網走地方での繁殖の可能性を示唆しているが、この個体は翌日以降観察されなかった。小清水原生花園には冬鳥として稀に飛来し、多くの場合は越冬するが、近年は冬期に観察されることがなく、春期に観察されるのみである。近年では1996年4月10日に1羽が観察された。なお、濤沸湖からやや南にある網走市・浦士別市街においても、1995年4月9日に1羽が観察された。

・コルリ（157）：1996年5月28日に、小清水原生花園において、雄1羽が観察された。本種は山地の林のヤブの中にすむ（藤巻、1986）ため、この個体は渡り途中に通過したものと思われる。小清水原生花園では、同じ時期にセンダイムシクイやコサメビタキ等、通常は観察されない種が多く記録されたため、これらの鳥類の渡りの経路となっていると思われる。

・イソヒヨドリ（159）：斜里町ウトロや網走市能取岬周辺等の岩礁地では普通に観察されるが、網走港～斜里漁港までの海岸線では稀な種であり、本調査期間中では1996年5月13日に斜里漁港において、雌1羽が観察されたのみである。

・シマセンニュー (166) : 止別海岸においては度々観察されたが、小清水原生花園では、1995年5月29日にさえずり飛翔を行う1羽が観察されたのみである。日本野鳥の会小清水支部 (1987) には、「(小清水) 原生花園や瀧沸湖畔 (等) でよくその姿を見る」と記載されている。筆者は本種の繁殖時期に小清水原生花園を含めた草原地帯での観察を頻繁に行っていないため、観察できなかったとも考えられるが、過去に比べ、飛来数が減少している可能性も否定できないと思われる。

・メジロ (180) : 網走地方では以前は稀な種であった (佐々木, 1990) が、近年は各地で普通に観察されるようになり、急激に個体数が増加しているものと思われる。瀧沸湖周辺においては、主に丸万川河口付近において観察されることが多く、湖岸や道路脇のヤナギに、数羽~十数羽、時に数十羽の群で群がるところを観察されることも稀ではなくなった。

・シラガホオジロ (181) : 斜里漁港周辺において、1996年12月31日~1997年1月8日まで、3羽の小群が継続的に観察された。

・ミヤマホオジロ (183) : 佐々木 (1990) には本種の記載がなく、また、古くから地元で観察を行っている者の証言によれば、以前は稀な種であったとされるが、近年は網走市内の林縁等で越冬する、数羽~十数羽の小群が観察されており、飛来数が増加する傾向にあると思われる。この地域では、1996年5月8日に、瀧沸湖 (丸万川河口) において1羽が観察された。なお、斎藤 (1996) は、本種の移動型を旅鳥としているが、この点については疑問である。越冬例 (個体) が多いことを考えると、冬型とするのが妥当と思われる。

・ツメナガホオジロ (186) : 網走地方ではほぼ毎年1羽、あるいは数羽が観察されるが、最近では1996年11月13日に、小清水原生花園において1羽、同年12月27日に、止別川河口南側の牧草地において22羽の群、1997年1月3日に、斜里漁港周辺において8羽の小群が観察された。なお、知床半島においては、1991年12月にポンベツ川河口において1羽観察されている (青木則幸, 私信)。

・ユキホオジロ (187) : 本種は冬鳥として飛来するが、以前は百羽を越える群で観察されることは稀であった。しかし近年、毎年3月下旬に、網走市北浜よりの瀧沸湖畔にあるデントコーン畑に

大群が集結することが明らかとなった。この群は多い年で3000羽に達する (花田行博, 私信) が、全国的に飛来数が少なかったと思われる1995/96年の冬期には、最大時でも700~800羽が観察されたのみであった。この群中には、デントコーンの切り株に止まってさえずりを行う個体も多く見られた。

・ホシムクドリ (197) : 1994年10月29日に、瀧沸湖・丸万川河口付近において、電線に止まる約30羽ほどのムクドリ群中に混在する1羽が観察された。時期的に、渡り途中に迷行したものが、ムクドリ群中に混在して行動を共にしていたものと思われる。

・ワタリガラス (202) : 斜里漁港周辺においては、1996年1月18日に1羽が観察されたのを初めとして、以降、3月3日まで不定期に観察された。最多記録数は2月12日の9羽である。1997年には、1月8~13日まで、1羽が継続的に観察された。

おわりに

筆者が自らのフィールドとし、継続的な観察を行ってきたのは本論文に挙げた5地域が主なものであるが、網走市・小清水町・斜里町には他にも、知床国立公園をはじめとして優れた探鳥地が数多くあり、また、未開拓のフィールドも多く残っているものと思われる。筆者はこの12年ほどの間に、この地域だけで250種を越える種を観察しているが、これは当地域が非常に恵まれた自然環境を有していることの現れと思われる。しかし現在、この広大なフィールドに対し、そこで観察を行う者の数はとて言え、あまりにも少ない。詳細且つ正確な鳥類相の把握には、未だほど遠いのが現状であると思われる。様々な機関・団体による啓蒙活動が効果を現し、野鳥に目を向けてくれる方々が徐々にでも増えてくれれば、と願う。また、本報告が、古くから当地方で野鳥観察を行ってきた諸先輩方にとっての発憤材料となれば、筆者としてこれほど嬉しいことはない。

最後になったが、本報告を発表する機会を与えて頂き、作製するにあたってご指導頂いた、知床博物館の宇仁義和、中川元の両氏、また「ホイグリンカモメ」の同定について貴重なご意見を下さった森岡照明氏、ならびに、本論文作製にあたって助言を下さった青木則幸氏、この4氏に深く感謝する。

## 引用文献

- Grant, P. J. 1986. Gulls: a guide to identification. T&AD Poyser, Calton.
- 原島政巳 1991. サギ類の見分け方. BIRDER, 5 (5) : 4-11.
- Harris, A., Tucker, L. and Vinicombe, K. 1989. The Macmillan Field Guide to: Bird Identification.. The Macmillan Press Ltd, London & Basingstoke.
- Harris, A., Shirihai, H. and Christie, D. 1996. The Macmillan: Birder's Guide to European and Middle Eastern Birds. Macmillan, London.
- Harrison, P. 1985. Seabirds: an identification guide (Revised edition). Christopher Helm, London.
- 北海道公害防止研究所 1990. 北海道の湖沼. 北海道公害防止研究所, 札幌.
- 藤巻裕蔵 (監修) 1986. 新版 北海道の野鳥. 北海道新聞社, 札幌.
- 池内俊雄 1997. ヒシクイとオオヒシクイ. BIRDER, 11 (1) : 38-43.
- 謝花栄昭 1995. フィールドノート クビワキンクロ. 野鳥, 579 : 49.
- 金田彦太郎 1991. 避けて通れぬ雑種の世界. 日本の生物, 5 (2) : 20-26.
- 川崎康弘 1996. 北の国の珍鳥ラッシュ. BIRDER, 10 (3) : 84-85.
- 呉地正行 1989. 全国のコクガンの分布. ワイルドライフレポート, 10 : 82-85.
- Lewington, I., Alstrom, P., Colston, P. 1991. A Field Guide to the: Rare Birds of Britain and Europe. Harper Collins Publishers, Vitoria.
- 森信也 1979. 斜里町管内の鳥類相について. 知床博物館研究報告第1集: 1-10.
- 中川元 1982. 知床半島先端部の鳥類. 知床博物館研究報告第4集: 49-54.
- 中川元 1987. 知床半島沿岸におけるヒメクビワカモメの観察. 鳥, 36 : 65-67.
- 中川元 1988. 知床の動物群集: 3鳥類, 知床の動物. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
- 中川元 1995. 斜里川にクビワキンクロ飛来. 北海道野鳥だより, 100 : 14.
- 中村登流 1986. 野鳥の図鑑 水の鳥①. 保育社, 大阪.
- 日本野鳥の会北見支部 1996. オホーツク圏内の野鳥. 日本野鳥の会北見支部, 北見.
- 日本野鳥の会小清水支部 1987. 小清水の野鳥. 小清水町教育委員会, 小清水.
- 小川巖, 城殿博, 百武充, 竹田津実, 米田政明 1975. 野鳥生息環境実態調査報告書・トーフツ湖: 29~58. 北海道生活環境部自然保護課.
- Olsen, M. K. and Larsson, H. 1995. Terns: of Europe and North America. Christopher Helm, London.
- 斎藤喜一郎 1996. 網走の野鳥277. 東京農業大学生物産業学部オホーツク野生動物研究会, 網走.
- 佐々木孝夫 1990. 網走地方の鳥類相. 東京農業大学生物産業学部オホーツク野生動物研究会, 網走.
- 佐藤幸雄 1995. フィールドノート ソリハシセイタカシギ. 野鳥, 576 : 49.
- Sonobe, K., Usui, S. and Taniguchi, T. 1993. A Field Guide to: Waterbirds of Asia. Wild Bird Society of Japan, Tokyo.
- 高野伸二 1985. 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京.
- 玉田誠 1987. 瀧沸湖の白鳥. 小清水の野鳥: 141-155, 小清水町教育委員会, 小清水.
- 氏原巨雄, 氏原道昭 1992. カモメ識別ガイド. 文一総合出版, 東京.
- V.A.ネチャエフ 1996. サハリンの鳥類2. 極東鳥類研究会, 帯広.
- W・(テッド・)ホウゲンドウレン, ニール・C・モーズ, 森岡照明 1996. 日本における足の黄色い「セグロカモメ」成鳥の観察と識別. BIRDER, 10 (4) : 64-73.
- 山階芳麿 (編) 1986. 世界鳥類和名辞典. 大学書林, 東京.

表. 今回の調査で観察された鳥類

種名	観察時期	観察地					学名
		網走港周辺 (1994~ 96年の冬)	藻琴湖周辺 (1995/96年 の3~8月)	濁渚湖周辺 (1994.8~ 1996.12)	止別海岸周辺 (1994.8~ 1996.12)	斜里漁港周辺 (1995.11~97.2 :盛夏を除く)	
1 フルマカモメ	F, W				○		<i>Fulmarus glacialis</i>
2 ハイイロミズナギドリ	Sp, S, F				○	○	<i>Puffinus griseus</i>
3 ハシボソミズナギドリ	Sp, S, F				○	○	<i>Puffinus tenuirostris</i>
4 ハイイロウミツバメ	F, W	○					<i>Oceanodroma furcata</i>
5 アビ	F, W	○			○	○	<i>Gavia stellata</i>
6 オオハム	S, F, W	○			○	○	<i>Gavia arctica</i>
7 シロエリオオハム	S, F, W	○			○	○	<i>Gavia pacifica</i>
8 ハシジロアビ	F				○		<i>Gavia adamsii</i>
9 カイツブリ	Sp, S, F, W		○	○	○		<i>Tachybaptus ruficollis</i>
10 ミミカイツブリ	F, W			○		○	<i>Podiceps auritus</i>
11 アカエリカイツブリ	F, W	○			○	○	<i>Podiceps griseus</i>
12 カンムリカイツブリ	F, W				○		<i>Podiceps cristatus</i>
13 ハジロカイツブリ	F, W				○	○	<i>Podiceps nigricollis</i>
14 ウミウ	Sp, S, F, W	○		○	○	○	<i>Phalacrocorax capillatus</i>
15 ヒメウ	Sp, S, F, W	○			○	○	<i>Phalacrocorax pelagicus</i>
16 アオサギ	Sp, S, F, W		○		○	○	<i>Ardea cinerea</i>
17 ダイサギ	Sp			○	○		<i>Ardea alba</i>
18 チュウサギ	Sp		○	○	○		<i>Egretta intermedia</i>
19 ミサゴ	Sp, S, F						<i>Pandion haliaetus</i>
20 トビ	Sp, S, F, W	○	○	○	○	○	<i>Milvus migrans</i>
21 オジロワシ	Sp, S, F, W	○	○	○		○	<i>Haliaeetus albicilla</i>
22 オオワシ	S, F, W	○	○	○	○	○	<i>Haliaeetus pelagicus</i>
23 ハイイロチュウヒ	F, W			○	○		<i>Circus cyaneus</i>
24 チュウヒ	Sp, S, F, W		○	○			<i>Circus spilonotus</i>
25 ツミ	W	○					<i>Accipiter gularis</i>
26 ハイタカ	F, W				○	○	<i>Accipiter nisus</i>
27 オオタカ	F, W			○	○	○	<i>Accipiter gentilis</i>
28 ノスリ	F, W				○		<i>Buteo buteo</i>
29 コチョウゲンボウ	W			○	○		<i>Falco columbarius</i>
30 チゴハヤブサ	S, F			○			<i>Falco subbuteo</i>
31 ハヤブサ	F, W	○			○	○	<i>Falco peregrinus</i>
32 コブハクチョウ	Sp			○	○		<i>Cygnus olor</i>
33 オオハクチョウ	Sp, F, W	○	○	○	○	○	<i>Cygnus cygnus</i>
34 コハクチョウ	Sp, F, W		○	○	○	○	<i>Cygnus bewickii</i>
35 ヒシクイ	Sp, S, F			○	○		<i>Anser fabalis serrirostris</i>
(オオヒシクイ)	F			○	○		<i>Anser fabalis middendorffii</i>
36 マガン	Sp, F			○	○		<i>Anser albifrons</i>
37 コクガン	W	○			○		<i>Branta bernicla</i>
38 オシドリ	Sp, S, W		○			○	<i>Aix galericulata</i>
39 ヒドリガモ	Sp, S, F, W	○	○	○	○	○	<i>Anas penelope</i>
40 アメリカヒドリ	Sp, F			○			<i>Anas americana</i>
41 ヨシガモ	Sp, S, F, W	○	○	○			<i>Anas falcata</i>
42 オカヨシガモ	Sp, S, F, W	○	○	○			<i>Anas strepera</i>
43 トモエガモ	W			○		○	<i>Anas formosa</i>
44 コガモ	Sp, F, W		○	○	○	○	<i>Anas crecca crecca</i>
(アメリカコガモ)	F			○			<i>Anas crecca carolinensis</i>
45 マガモ	Sp, S, F, W	○	○	○	○	○	<i>Anas platyrhynchos</i>
46 カルガモ	Sp, S, F, W		○	○	○	○	<i>Anas poecilorhyncha</i>
47 オナガガモ	Sp, F, W		○	○	○	○	<i>Anas acuta</i>
48 シマアジ	Sp, F		○	○	○		<i>Anas querquedula</i>
49 ハシビロガモ	Sp, S, F, W		○	○	○	○	<i>Anas clypeata</i>
50 ホシハジロ	Sp, F, W	○	○	○		○	<i>Aythya ferina</i>
51 クビワキンクロ	Sp, W					○	<i>Aythya collaris</i>
52 キンクロハジロ	Sp, S, F, W	○	○	○	○	○	<i>Aythya fuligula</i>
53 スズガモ	Sp, S, F, W	○	○	○	○	○	<i>Aythya marila</i>
54 シノリガモ	Sp, F, W	○	○	○	○	○	<i>Histrionicus histrionicus</i>
55 コオリガモ	F, W				○	○	<i>Clangula hyemalis</i>
56 クロガモ	Sp, S, F, W	○	○	○	○	○	<i>Melanitta nigra</i>
57 アラナミキンクロ	W		○	○			<i>Melanitta perspicillata</i>
58 ビロードキンクロ	Sp, S, F, W	○	○	○	○	○	<i>Melanitta fusca</i>
59 ホオジロガモ	Sp, F, W	○	○	○	○	○	<i>Bucephala clangula</i>
60 ミコアイサ	Sp, S, F, W		○	○	○	○	<i>Mergus albellus</i>
61 ウミアイサ	Sp, F, W	○	○	○	○	○	<i>Mergus serrator</i>
62 カワアイサ	Sp, S, F, W	○	○	○	○	○	<i>Mergus merganser</i>
63 ウズラ	F			○			<i>Coturnix japonica</i>
64 ナベヅル	Sp			○			<i>Grus monacha</i>
65 クイナ	Sp, F, W		○	○			<i>Rallus aquaticus</i>
66 パン	Sp, S		○	○			<i>Gallinula chloropus</i>
67 セイタカシギ	Sp, S					○	<i>Himantopus himantopus</i>
68 ソリハシセイタカシギ	F			○			<i>Recurvirostra avocetta</i>
69 ムナグロ	Sp, S, F			○		○	<i>Pluvialis dominica</i>
70 ダイゼン	Sp, S, F			○		○	<i>Pluvialis squatarola</i>

種名	観察時期	観察地					学名
		網走港周辺 (1994~ 96年の冬)	藻琴湖周辺 (1995/96年 の3~8月)	濁瀧湖周辺 (1994.8~ 1996.12)	止別海岸周辺 (1994.8~ 1996.12)	斜里漁港周辺 (1995.11~97.2 :盛夏を除く)	
71 ハジロコチドリ	Sp, S, F			○			<i>Charadrius hiaticula</i>
72 コチドリ	Sp, S, F		○	○		○	<i>Charadrius dubius</i>
73 シロチドリ	W					○	<i>Charadrius alexandrinus</i>
74 メダイチドリ	Sp, S, F			○		○	<i>Charadrius mongolus</i>
75 オグロシギ	Sp, S, F			○			<i>Limosa limosa</i>
76 オオソリハシシギ	Sp, S, F			○		○	<i>Limosa lapponica</i>
77 コシャクシギ	S			○			<i>Numenius minutus</i>
78 チュウシャクシギ	S, F			○	○		<i>Numenius phaeopus</i>
79 ホウロクシギ	Sp, S, F			○			<i>Numenius madagascariensis</i>
80 ツルシギ	Sp, F, W			○		○	<i>Tringa erythropus</i>
81 アカアシシギ	Sp, S			○			<i>Tringa totanus</i>
82 コアアシシギ	S, F			○			<i>Tringa stagnatilis</i>
83 アオアシシギ	Sp, S, F			○	○	○	<i>Tringa nebularia</i>
84 カラフトアオアシシギ	F			○			<i>Tringa guttifer</i>
85 クサシギ	Sp		○	○			<i>Tringa ochropus</i>
86 タカアシシギ	Sp, S, F		○	○			<i>Tringa glareola</i>
87 ソリハシシギ	Sp, S, F			○			<i>Xenus cinereus</i>
88 イソシギ	Sp, S, F			○		○	<i>Actitis hypoleucos</i>
89 キアシシギ	Sp, S, F			○	○	○	<i>Heteroscelus brevipes</i>
90 キョウジョシギ	Sp, S, F			○	○	○	<i>Arenaria interpres</i>
91 アカエリヒレアシシギ	Sp, S, F			○	○		<i>Phalaropus lobatus</i>
92 オオジシギ	Sp, S		○	○		○	<i>Gallinago hardwickii</i>
93 タシギ	F			○			<i>Gallinago gallinago</i>
94 コオバシギ	Sp, S, F			○			<i>Calidris canutus</i>
95 オバシギ	Sp, S, F			○			<i>Calidris tenuirostris</i>
96 ミユビシギ	Sp, F			○	○	○	<i>Calidris alba</i>
97 トウネン	Sp, S, F			○	○	○	<i>Calidris ruficollis</i>
98 オジロトウネン	Sp, S, F			○	○	○	<i>Calidris temminckii</i>
99 ヒバリシギ	Sp, S, F		○	○			<i>Calidris subminuta</i>
100 アメリカウズラシギ	F			○			<i>Calidris melanotos</i>
101 ウズラシギ	Sp, F			○			<i>Calidris acuminata</i>
102 ハマシギ	Sp, S, F, W	○		○	○	○	<i>Calidris alpina</i>
103 サルハマシギ	Sp, S, F			○			<i>Calidris ferruginea</i>
104 ヘラシギ	S, F			○			<i>Eurynorhynchus pygmaeus</i>
105 キリアイ	S, F			○			<i>Limicola falcinellus</i>
106 エリマキシギ	F			○			<i>Philomachus pugnax</i>
107 オオトウゾクカモメ	F				○		<i>Catharacta maccormicki</i>
108 トウゾクカモメ	S, F				○	○	<i>Stercorarius pomarinus</i>
109 クロトウゾクカモメ	S, F					○	<i>Stercorarius parasiticus</i>
110 シロハラトウゾクカモメ	S				○		<i>Stercorarius longicaudus</i>
111 ソウゲカモメ	W					○	<i>Pagophila alba</i>
112 ウミネコ	Sp, S, F, W	○	○	○	○	○	<i>Larus crassirostris</i>
113 カモメ	Sp, F, W	○	○	○	○	○	<i>Larus canus</i>
114 ホイグリンカモメ	F			○	○	○	<i>Larus heuglini</i>
115 セグロカモメ	Sp, F, W	○		○	○	○	<i>Larus argentatus vegae</i>
(smithsonianus)	W			○	○	○	<i>Larus argentatus smithsonianus</i>
116 オオセグロカモメ	Sp, S, F, W	○	○	○	○	○	<i>Larus schistisagus</i>
117 ワシカモメ	S, F, W	○	○	○	○	○	<i>Larus glaucescens</i>
118 シロカモメ	Sp, F, W	○	○	○	○	○	<i>Larus hyperboreus</i>
119 エリカモメ	Sp, S, F, W	○	○	○	○	○	<i>Larus ridibundus</i>
120 ヒメクビワカモメ	W	○				○	<i>Rhodostethia rosea</i>
121 ミツエビカモメ	Sp, F, W	○		○	○	○	<i>Rissa tridactylus</i>
122 ハジロクロハラアジサシ	Sp, F			○	○	○	<i>Chidonias leucoptera</i>
123 アジサシ	Sp, S, F			○	○	○	<i>Sterna hirundo</i>
124 ハシブトウミガラス	F, W	○			○	○	<i>Uria lomvia</i>
125 ウミガラス	F, W	○			○	○	<i>Uria aalge</i>
126 ウミバト	F, W	○			○	○	<i>Cepphus columba</i>
127 ケイマフリ	S, F, W	○			○	○	<i>Cepphus carbo</i>
128 マダラウミスズメ	S, F, W	○			○	○	<i>Brachyramphus marmoratus</i>
129 ウミスズメ	F, W	○			○	○	<i>Synthliboramphus antiquus</i>
130 エトロフウミスズメ*	W				○	○	<i>Aethia cristatella</i>
131 コウミスズメ	F, W				○	○	<i>Aethia pusilla</i>
132 ウトウ	S, F				○	○	<i>Cerorhinca monocerata</i>
133 キジバト	Sp, F		○	○	○	○	<i>Streptopelia orientalis</i>
134 アオバト	S		○	○	○	○	<i>Treron sieboldii</i>
135 カッコウ	Sp, S, F		○	○	○	○	<i>Cuculus canorus</i>
136 ツツドリ	Sp, S		○	○	○	○	<i>Cuculus saturatus</i>
137 コミミズク	F, W		○	○	○	○	<i>Asio flammeus</i>
138 ハリオアマツバメ	Sp, S, F		○	○	○	○	<i>Hirundapus caudacuta</i>
139 アマツバメ	Sp, S, F		○	○	○	○	<i>Apus pacificus</i>
140 カワセミ	Sp, S, F		○	○	○	○	<i>Alcedo atthis</i>
141 アリスイ	Sp, S		○	○	○	○	<i>Jynx torquilla</i>

種名	観察時期	観察地					学名
		網走港周辺 (1994~ 96年の冬)	藻琴湖周辺 (1995/96年 の3~8月)	瀧瀨湖周辺 (1994.8~ 1996.12)	止別海岸周辺 (1994.8~ 1996.12)	斜里漁港周辺 (1995.11~97.2 :盛夏を除く)	
142 コゲラ	Sp, S		○				<i>Picoides kizuki</i>
143 コアカゲラ	W			○		○	<i>Picoides minor</i>
144 アカゲラ	Sp, S, F, W		○	○			<i>Picoides major</i>
145 ヤマガラ	Sp			○			<i>Picus canus</i>
146 ヒバリ	Sp, S, F		○	○		○	<i>Alauda arvensis</i>
147 ショウドウトツバメ	Sp, S, F		○	○		○	<i>Riparia riparia</i>
148 ツバメ	Sp			○			<i>Hirundo rustica</i>
149 ツメナガセキレイ	F			○			<i>Motacilla flava</i>
150 ハクセキレイ	Sp, S, F, W	○	○	○		○	<i>Motacilla alba</i>
151 タヒバリ	Sp, F			○			<i>Anthus spinoletta</i>
152 ヒヨドリ	Sp, S, F, W		○	○		○	<i>Hyppipetes amaurotis</i>
153 アカモズ	S					○	<i>Lanius cristatus</i>
154 モズ	Sp, S, F, W		○	○		○	<i>Lanius bucephalus</i>
155 オオモズ	Sp, W			○			<i>Lanius excubitor</i>
156 ノゴマ	Sp, S			○		○	<i>Erithacus calliope</i>
157 コルリ	Sp			○			<i>Erithacus cyane</i>
158 ノビタキ	Sp, S, F		○	○		○	<i>Saxicola torquata</i>
159 イソヒヨドリ	Sp					○	<i>Monticola solaris</i>
160 クロツグミ	Sp			○			<i>Turdus cardis</i>
161 アカハラ	Sp, S, F			○			<i>Turdus chrysolus</i>
162 ツグミ	Sp, F, W			○		○	<i>Turdus naumanni</i>
163 ヤブサメ	Sp, S		○				<i>Cettia squameiceps</i>
164 ウグイス	Sp			○			<i>Cettia diphone</i>
165 エゾセンニュウ	Sp, S		○			○	<i>Locustella fasciolata</i>
166 シマセンニュウ	Sp, S			○		○	<i>Locustella ochotensis</i>
167 マキノセンニュウ	Sp, S			○		○	<i>Locustella lanceolata</i>
168 コヨシキリ	Sp, S, F		○	○			<i>Acrocephalus bistrigiceps</i>
169 オオヨシキリ	Sp, S			○			<i>Acrocephalus orientalis</i>
170 センダイムシクイ	Sp, S		○	○			<i>Phylloscopus occipitalis</i>
171 キビタキ	Sp			○			<i>Ficedula narcissina</i>
172 エゾビタキ	F			○			<i>Muscicapa griseisticta</i>
173 コサメビタキ	Sp			○			<i>Muscicapa latirostris</i>
174 エナガ	Sp, F, W		○	○		○	<i>Aegithalos caudatus</i>
175 ハシブトガラ	Sp, S, F, W		○	○		○	<i>Parus palustris</i>
176 コガラ	Sp, F, W			○			<i>Parus montanus</i>
177 ヒガラ	F, W			○			<i>Parus ater</i>
178 シジュウカラ	Sp, S, F, W		○	○		○	<i>Parus major</i>
179 ゴジュウカラ	Sp, S, F, W		○	○		○	<i>Siitta europaea</i>
180 メジロ	Sp, S, F			○			<i>Zosterops japonicus</i>
181 シラガホオジロ	W					○	<i>Emberiza leucocephala</i>
182 ホオアカ	Sp, S, F		○	○		○	<i>Emberiza fucata</i>
183 ミヤマホオジロ	Sp			○			<i>Emberiza elegans</i>
184 アオジ	Sp, S, F		○	○		○	<i>Emberiza spodocephala</i>
185 オオジュリン	Sp, S, F		○	○		○	<i>Emberiza schoeniclus</i>
186 ツメナガホオジロ	F, W			○		○	<i>Calcarius lapponicus</i>
187 ユキホオジロ	F, W			○		○	<i>Plectrophenax nivalis</i>
188 カワラヒワ	Sp, S, F, W		○	○		○	<i>Carduelis sinica</i>
189 マヒワ	Sp, W					○	<i>Carduelis spinus</i>
190 ベニヒワ	F, W			○		○	<i>Acanthis flammea</i>
191 ハギマシコ	W	○					<i>Leucosticte arctoa</i>
192 ベニマシコ	Sp, S, F		○	○		○	<i>Uragus sibiricus</i>
193 シメ	Sp, S, F, W			○		○	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>
194 ニュウナイスズメ	Sp, S		○	○			<i>Passer rutilans</i>
195 スズメ	Sp, S, F, W	○		○		○	<i>Passer montanus</i>
196 コムクドリ	Sp, S		○	○		○	<i>Sturnus philippensis</i>
197 ホシムクドリ	F			○			<i>Sturnus vulgaris</i>
198 ムクドリ	Sp, S, F, W		○	○		○	<i>Sturnus cineraceus</i>
199 カケス	F, W			○			<i>Garrulus glandarius</i>
200 ハシボソガラス	Sp, S, F, W	○	○	○		○	<i>Corvus corone</i>
201 ハシブトガラス	Sp, S, F, W	○	○	○		○	<i>Corvus macrorhynchos</i>
202 ワタリガラス	W					○	<i>Corvus corax</i>

“観察時期凡例：Sp…春期（4,5月）、S…夏期（6~8月）、F…秋期（9~11月）、W…冬期（12~3月）。”

\*（死体確認）